

平成9年4月30日現在

能登川 NOTOGAWA

世帯数 189戸
人口 675人

地勢と地名

東に琵琶湖国定公園の中のきぬがさやま織山を、西に伊庭内湖を望み、南は安土山に囲まれている景勝地です。能登川の地名の起こりはわかりませんが、アイヌ語の能登は「ノット」で岬の意味があり、地勢上から名づけられたと思われます。

町並みとシンボル協議所

400年前に計画的につくられた村です。町並みは朝鮮人街道に沿ってきれいになり、生活水路も道を中心として東西に整備されています。明治時代の建築物「協議所」は、村のシンボルであり村行政の事務所で、情報の収集・発信地としての重要な役割を果たしています。

御殿地と春祭り・ゲートボール場

村の北東部には、江戸時代の將軍上洛施設の遺跡が残っています。この遺跡を村では「御殿地」と呼び、村の鎮守あたご愛宕神社のお旅所たびじよとなっています。春祭りには、

中学1年生の女子生徒が舞姫となり、その舞う姿は祭りをいっそう盛り上げています。また、御殿地の一部はゲートボール場として整備され、老人の健康と生きがいの場に利用されています。

能登川港跡は愛宕神社・遊園地

昔、穀物輸送の港がありましたが、いまは愛宕神社が鎮座し、その南側は遊園地として整備利用されて、憩いの広場となっています。

この広場には桜が多く植樹されて、春祭り頃は爛漫らんまんと咲き誇り、また、西小学校より移植された藤の木が立派に生育し、毎年見事な花を咲かせて区民の心をなごませてくれます。



能登川協議所 石門は明治6年(1873)開校の学校跡



御殿地



能登川港跡の遊園地

平成9年4月30日現在

安楽寺 ANRAKUJI

世帯数 39戸
人口 146人

安楽寺の歴史は古く、また村そのものの歴史もはっきりしていません。寺はきぬがさやま織山無量院安楽寺と号し、聖徳太子の開基と伝えられ、比叡山横川楞嚴院恵心院の末寺です。また、本尊千手十一面観音像は、聖徳太子の作とされ、多くの僧坊（三十三坊）があったとも言われ、推古天皇や聖徳太子ゆかりの湖東の大寺も、天正4年（1576）4月の織田信長の兵火、その後2回の火災によって残念ながら、すべての堂塔を焼失しました。

また、安楽寺には、『はちおうじ ほうきょうでんらいもんじょ八王子法橋伝来文書』という古文書があります。これは、法橋五人衆という制度があり、村の五人の長老が就任し死ぬまで資格があります。最長老の人が法橋となり、古文書箱を受け継いでいきます。その古文書には、中世からの安楽寺のことが記述されています。安楽寺と八王子社（伊庭の坂下し）との関係も深く、仏教的な色彩が強かったこともうかがえます。

安楽寺は、このような歴史ある村で、安楽寺内の公園では四季折々の花をみることができます。春には、桜・すいせん・さつき、また秋には、紅葉も色あざやかです。

歴史と自然豊かな安楽寺へ、一度訪れていただきたいと思います。



安楽寺



安楽寺の集落



織峰三神社

平成9年4月30日現在

北須田 KITASUDA

世帯数 41戸
人口 142人

“古文書が語る氏神の歴史” - 守国神社と徳川の旗本三枝氏

北須田の氏神、守国神社には祭神の三枝守国とその家系に関する古文書が数多く残され、これに基づいた社歴が社務所前の石碑に刻まれています。この『三枝家文書』と明治初期に書かれた『守国神社永代記録』等から、再度社歴を検証し、石碑の文に少し補足を試みました。

三枝氏とは

初代三枝虎吉は甲斐国（山梨県）で武田信玄の重臣でしたが、長篠の合戦で武田氏滅亡後は徳川家康に仕え、代々幕府の直参旗本となりました。元禄11年（1698）に6代目守相が領地替えて近江三郡（神崎、蒲生、野洲）内に合計7000石を知行、内2000石の伊庭に代官所を置きました。これを伊庭陣屋（謹節館のあたり）と言い、北須田もこの時点で三枝氏が領主となり、その支配下で明治に及びます。

守国神社の祭神は

祭神の守国命はこの三枝家の元祖で遠く平安時代仁明天皇（833～850）の頃活躍した清和源氏の流れをくむ武人で、先祖代々この守国を大明神として江戸屋敷で祀って来ました。前述の三枝虎吉は守国より24代目に当たります。

守国神社が須田に遷座の経緯

明治維新で采地（領地）奉還、一士族となった三枝

守道・守経父子が江戸屋敷より近江に移住するに当たり、代々崇敬して来た守国大明神の奉供に深く心痛していました。一方、当時北須田に氏神がなく、かつ、維新後の分村（伊庭村の枝郷より分離）問題ともからみ、双方のおもわくが一致、東京に店を持つ深田興三兵衛氏の計らいもあり、明治2年（1869）に御神鏡・由緒系図・当地への遷座證文などを村民挙げてお受けし、現在地に神社を移しました。

村社としての格付

遷座当時は、須田川堤の林草地でしたが、地主の人々の寄進および村中の奉仕等により開地、以後順次整備され、明治12年に本社殿を造営鎮座しました。明治14年には村社の資格を得ています。その後も氏子の崇敬厚く、昭和初期に多くの篤志家により、現在の姿となりました。



集落の中心をはしる朝鮮人街道



遷座證文